

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 29 回
 第 6 章 鳥越信先生
 その 2 児童文学研究のデザイン（上）

1979（昭和 54）年 11 月、鳥越信先生（1929～2013 年）が監修した児童文学史展のお手伝いで、鳥越先生といっしょに沖縄に行った。私は、1 年浪人して入学した大学院の 1 年次で、24 歳だった。

国際児童文学館の原像

1979（昭和 54）年秋に、鳥越信先生が監修して沖縄で開催された「児童文学のあゆみ展」の準備にかかわったころから、1981（昭和 56）年 3 月まで、東京・練馬にあった鳥越先生のご自宅の書庫の整理をするアルバイトを折々していた。自分では「書庫番」というていた。そのころ、先生は早稲田大学の教授だったから、私の前には早稲田の教え子の人たちが、ときどき、お手伝いをしていたようだ。

書庫には、そのうち大阪府に寄贈され、大阪府立国際児童文学館の基になった約 12 万点の資料が収蔵されていた。この連載の前々回（第 27 回）で少しふれた『日本児童文学史年表』1・2（『講座日本児童文学』別巻、明治書院 1975 年、77 年）を編纂するために集めた資料だという。整理は、かなり悪い状態だった。書庫は、母屋から渡り廊下で行かれるけれど、庭に独立している 2 階建てで、天井があまり高くない書庫の床を這いずりまわるようにして仕事をした。先生のところに展覧会の出品依頼があった本や雑誌をさがして取り出すなどもした。編集者の方が本を見に来られるのに応対したり、早稲田にかぎらず、いろいろな大学の学生が卒業論文の資料などを求めて、おとずれると、いっしょに本をさがしたりした。私も、自分に必要な本を借り出して、近所の文房具屋に行って、コピーをとらせてもらった。

鳥越先生の練馬のお宅の書庫は、すでに文学館の機能をもっていたと思う。あの書庫が、私にとってはなつかしい、国際児童文学館の原像として、いまでも心に残っている。

書庫にはじめて行ったのは、「書庫番」になるより前だったはずだ。日本児童文学者協会の機関誌『日本児童文学』（当時は偕成社発行）の別冊として刊行された『資料／戦後児童文学論集』全 3 巻（1980 年 3 月、5 月、7 月）のためにおとずれただと記憶している。戦後の重要な児童文学論を収めた 3 冊の『論集』は、鳥越先生もメンバーのひとりである編集委員会によって編まれた。私は、資料収集などに協力していた。

基礎資料の整備

すでに刊行されていた『日本児童文学史年表』1・2 は、「日本の児童文学に関連するあらゆる事象を、総合的・網羅的にとりあげ、それを編年体の表に示そうと試みたもの」（「はしがき」）で、明治元年から 1945 年の敗戦までをあつかっている。鳥越先生は、原稿を精査して編まれた『校定新美南吉全集』全 12 巻・別巻 2（大日本図書 1980～83 年）や、大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』全 3 巻（大日本図書 1993 年）の編集の中心にもなっていく。このころ、先生を中心に児童文学研究の基礎資料の整備がすすんでいて、『資料／戦後児童文学論集』全

3巻も、そのなかで刊行されたものとも考えることもできる。

『論集』第1巻『復興期の思想と文学』はA5判全322ページ、中野重治「子供らのために」(『世界』1946年2月)から宮原誠一「『ちびくろ・さんぼ』のおもしろさ」(『文学』1954年12月)まで59編を収録した。第2巻『革新と模索の時代』は全460ページ、国分一太郎「『児童文学とは何か』の二、三について」(『日本児童文学大系3』月報、三一書房1955年6月)から横谷輝「リアリズムの可能性」上・下(『日本児童文学』1964年9月、12月)まで63編を収録。第3巻『過渡期の児童文学』は全386ページ、鳥越信「日本児童文学の戦後二十年」(『週刊読書人』1965年5月3日)から横谷輝「過渡期の児童文学運動」(『日本児童文学』1969年5月)まで67編を収録した。各巻末には、解説と解題、年表が付されている。

各巻の巻頭にかかげられた刊行のことばには、「戦後児童文学の流れを展望するという主旨から、本質論や状況を端的に反映するものが中心となった。このため、ごく一部の例外を除いて、作家論や作品論、外国児童文学に関連するもの、研究論文的なものは収録することができなかった。」という断り書きがある。『日本児童文学』の「200号記念」として、「再録・『日本児童文学』主要論文集」が3回にわたって掲載されたことがあったけれど(1973年5~7月、のべ21編を再録)、「戦後児童文学の流れを展望する」ような資料集の刊行は、これがはじめてだった。大きなプロジェクトだったといえる。

『資料／戦後児童文学論集』の編集委員は、鳥越信、向川幹雄、長谷川潮、大岡秀明、細谷建治、藤田のぼるの6人。先に書いたように、鳥越先生は当時は早稲田大学教育学部教授、向川先生は埼玉大学教育学部助教授だった。長谷川潮さん以下の4人は、そのころの「若手評論家」で、長谷川さんが編集長だった。編集実務の責任者は、のちに『まど・みちお全詩集』(理論社1992年)や、『松谷みよ子の本』全十巻・別巻(講談社1994~97年)などの現代児童文学作家の全集を圧倒的な精密さで編集することになる伊藤英治さんだが、まだ30代中ごろだった。私の資料収集は、時給の支払われるアルバイトだったけれど、『論集』各巻末の「戦後評論研究年表」は、各巻の編集担当者おふたりと私の共編になっている。また、第3巻の細谷建治の編集後記には、編集協力者として私の名前があげられている。

あのコピー取りの日々

手もとの古い手帳を見直していくと、1978(昭和53)年11月9日に「別冊「戦後児童文学論集」編集会議 5:30~ 偕成社4F会議室」という記事がある。木曜日の夕方からのこの会議で、『論集』編集委員会が正式に発足した。出席者のメモもあって、鳥越、向川、長谷川、大岡、細谷、藤田、伊藤、若林とある。編集委員は全員そろっている。そこに私もいたわけだが、おしまいの若林さんは、『日本児童文学』編集部で伊藤英治さんといっしょに働いていた若林ひとみさんだ。その後、ドイツ児童文学の翻訳家として活躍して、40冊あまりの訳書を刊行した。私より2歳年上だったが、2005(平成17)年に早く亡くなってしまった。

前に書いた、鳥越先生の書庫に最初に行ったのは、『論集』に必要な資料を見るためだったから、この編集会議のあとだったと思われる。だが、その翌年もふくめて、手帳のその後のページに記事が見当たらない。伊藤英治さんと「若手評論家」の何人かといっしょに行った覚えがあるのだが、約束していたはずの鳥越先生が不在で、仕事が成立しなかったのだ。そのために、手帳に書いていないのか。手帳

は、予定を書き込むというより、記録のために使っていた。

『論集』の資料は、鳥越先生の書庫でさがすのではなく、図書館を利用することになった。集中的に図書館に行き、かなり大量の文献の複写を依頼しつづけたのは、1979（昭和 54）年6月から9月末ごろまでである。私は、大学院博士課程前期課程の1年次、24歳になる前後だった。手帳の記録によれば、おもに国立国会図書館や東京都立中央図書館に行っている。現在とはちがって、そのころの国会図書館は、資料の出納にも複写にもずいぶん時間がかかったことを思い出す。それでも、『論集』の各巻ごとの三つの段ボール箱が埋まるくらいのコピーを集めた（資料のコピーの「落穂ひろい」は、1980年の年明けごろまでつづいた）。

『論集』第1巻の編集後記で、鳥越先生は、「まずはこの期間に書かれた児童文学・児童文化関係の評論・エッセイ等の総発掘から仕事はスタートしたが、そのためにはおびただしい時間とエネルギーが必要だった。」と書いている。同じ編集後記のページで、長谷川潮さんもこう書いている。

資料の収集過程で、編集委員、編集協力者、編集部員はずいぶんかけまわり、大量のコピーをとった。本資料集はそういう足の成果と、取捨選択についての数回の討議の上に成立している。言うまでもなく、これだけの資料を個人で収集することはほとんど不可能である。

「戦後児童文学評論集 21 選」

しかし、『資料／戦後児童文学論集』全3巻の企画がいきなり成立したわけではない。この前に、やはり、『日本児童文学』の別冊として刊行された『日本児童文学 100 選』（1979年1月）に、そのはじまりがある。この別冊は、100の作品を選ぶことをとおして、「現代日本児童文学とは、いったい何だったのか、どんな特徴を持っていたのか」（『日本児童文学 100 選』の刊行にあたって）を検証する意図で編集された。おしまいのIV章は、児童文学評論研究会＝「評論研」が選び、解説も執筆した「戦後児童文学評論集 21 選」だ。戦後児童文学に何らかの問題提起をしたものを選んだ。この時期、「評論研」は、「再読・戦後児童文学評論」というテーマで例会を重ねていた（1978年1月の第31回から、のべ11回）。

1975（昭和 50）年6月に発足した「評論研」のことは、この連載の第15回に書いた。「評論集 21 選」の解説は、そのあと、『論集』の編集委員になる長谷川潮、大岡秀明、細谷建治、藤田のぼるの4人に私がくわわった5人で分担して執筆した。私が解説を書いたのは、石井桃子ほか『子どもと文学』（中央公論社 1960年）、上野瞭『現代の児童文学』（中公新書 1972年）、『講座日本児童文学』全8巻・別巻2（明治書院 1973～77年）、安藤美紀夫『世界児童文学ノート』全3巻（偕成社 1975～77年）の4タイトルだ。3段組みの2ページ、あるいは4ページという分量だった。私は、大学院浪人をしていたころだったが、一生懸命勉強して、一生懸命書いた。

この「評論集 21 選」の仕事をおして、「評論研」のメンバーは、もっと網羅的に戦後の児童文学論を集めた資料集が必要だと考えるようになった。1978年11月の『論集』の正式な編集委員会よりも、だいぶ前、5月の連休のころにはもう、「評論研」のメンバーと伊藤英治さんとでプレ編集会議のようなこともしている。

その「評論研」の毎月の例会の会場が、そのころは新宿区百人町にあった日本児

児童文学者協会の事務局だったから、私は協会事務局でしばしばアルバイトをすることになったことも、以前に書いた。「評論研」の発足は、私の大学2年生の夏だったが、大学4年生の終わりには、事務局ではなく、協会の機関誌である『日本児童文学』編集部でアルバイトをするようになった。『日本児童文学』の版元が、ほるぷから偕成社にかわったころだ（1977年11月号から偕成社）。毎月刊行されていた機関誌や別冊の校正などが、おもな仕事だった。より児童文学の専門知識が必要な職場に異動したことになる。だから、『日本児童文学』別冊として刊行された『資料／戦後児童文学論集』全3巻には、評論研究会のメンバーとしても、機関誌編集部のアルバイトとしてもかかわったのだ。

『現代児童文学論集』全5巻

私は、『資料／戦後児童文学論集』全3巻のためのコピー取りをにない、暑い季節をすごした。資料の初出誌紙という生々しいものを、いちいちさがし出して、ページをめくり、複写の依頼をしつづけたのは、ずいぶん貴重な経験だった。私は、修士論文のテーマを戦後間もない昭和20年代の児童文学にすることを考えはじめた。

『論集』の資料収集のあとは、全3巻の校正作業が打ちつづいていった。これは、1979年度末、80年のはじめころにかかっていったから、私は、大学院に入学した年度の学年末のレポート作成の時間をうしなった。1年次のときは、結局、「国語学演習」通年4単位しか取得できなかったのである。それでも、大学院より、『論集』のほうが大事な勉強だと思っていた。私は、大学院博士課程前期課程に4年次まで在籍して、昭和20年代の児童文学を論じた修士論文「戦後児童文学史素描」をようやく提出した。

その後、『資料／戦後児童文学論集』全3巻は、2007年に刊行された日本児童文学者協会編『現代児童文学論集』全5巻（日本図書センター）の第1～3巻として復刻された。第4、5巻は新編集で、最初の3巻があつかった以降の1970年代、80年代の重要な児童文学論を収録した。新『論集』の編集委員は、砂田弘、藤田のぼる、佐藤宗子、宮川健郎、石井直人の5人である（編集協力者は藤本恵さん）。最初の『論集』が雑誌の別冊のソフトカバーだったのに対し、新『論集』は、ハードカバー、函入りになった。

最初の編集委員会のメンバーのうち、一番年長だった鳥越信先生は、2013年に亡くなられた（83歳）。編集実務の中心だった伊藤英治さんは、それより前、2010年に亡くなっている（65歳）。編集委員の向川幹雄先生、長谷川潮さん、大岡秀明さんも、すでに亡くなった。私自身は、昨年、満70歳になった。その私は、1990年代以降の児童文学論を収める新々『論集』が刊行できないかと願っている。刊行するなら、いまではないかとも考えているのだ。（つづく）

（付記） 宮川健郎「基調講演」（フォーラム報告集『児童文学とは何かを問い続けて 児童文学者 鳥越信の仕事に顧みる』大阪国際児童文学振興財団2015年）、宮川健郎「あのコピー取りの日々——『資料／戦後児童文学論集』全三巻のこと」（『日本近代文学館年誌 資料探索』12、2017年3月）と内容が重複する部分があることをおことわりします。